

令和五年度

「モラル・エッセイ」コンテスト

優秀作品集

福島県教育委員会



令和五年度 道德教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【中学生の部】

最優秀賞

「大好きな笑顔」

福島大学附属中学校

一年

横山 和奏 さん

優秀賞

「祖父」

いわき市立中央台北中学校

三年

山内 莊大 さん

優秀賞

「小さな怪獣達」

会津若松市立第二中学校

一年

星 隆太郎 さん

【高校生の部】

最優秀賞

「『適当』な母」

福島県立好間高等学校

三年

西山 莉央 さん

優秀賞

「じいちゃん、ありがとう」

福島県立福島商業高等学校

二年

酒井 祈愛 さん

優秀賞

「震災の記憶」

福島県立福島商業高等学校

二年

赤間伊吹樹 さん

【一般の部】

最優秀賞

「あいさつって…」

西郷村在住

蛭田 敦子 さん

優秀賞

「あの時できた家族の絆」

南相馬市在住

手戸みきこ さん

優秀賞

「やさしさに触れて」

鏡石町在住

小貫明日香 さん

大好きな笑顔

福島大学附属中学校

一年 横山 和奏

これは、私が小学生だったころの秋の話だ。

「今日、一緒に帰らない？」

その日は、少し恥ずかしがりな性格の友だちに声をかけた。すると友だちは、私を見ると照れながらうなずいた。

いつもは一緒に帰ることがあまりなかったからか、一日中わくわくしていた。

そして放課後、私は赤いランドセルを勢いよく背負い、帰ろうとした。すると突然先生が私を呼び止めた。それは、別のある友だちが私とけんかしたことを知り、話し合いの場を設けるためだった。先生が話を進める。別の友だちが意見を言う。たくさん話が飛びかう中、時間だけが過ぎていく。私はただ焦る気持ちに追われるうちに、話し合いは終わってしまった。

外に出てみると、すでに空は薄暗くなっていた。こんなに時間が

経ってしまったのかと思うと私はとても辛かった。ふと気配を感

じ前を向くと、そこには私と同じ背丈の影が見えた。近づいたらす

ぐに分かった。その影は一緒に帰る約束をした友だちだった。話し

合いは三十分以上続く長いものだったが、友だちはずっと私を待

っていたのだ。約束を守ってくれたのだ。うれしかった。それだけ

で、鼻がつんと熱くなって涙がこぼれそうだった。もう帰っている

だろうと勝手に思っていた私は友だちにたずねた。

「待たせてごめんね。どうして待っていてくれたの？」

そう聞くと友だちは、

「だって約束したもん。」

と、いつもの照れたような笑みを浮かべた。私はそんな友だちが大好きだと、心の底からそう思えた。

どんなことがあっても、人を信じて誰かのために何かをする大切さを、私は友だちから学んだ。いざという時に、私も同じようにできる自信はないが、この先は人を思いやる心を持ちながら、生きていきたいと思う。

祖父

いわき市立中央台北中学校

三年 山内 莊大

七月二十四日未明、電話が鳴った。祖父が死んだという連絡だった。八十二歳だった。

私は、早くに起こされ不機嫌になったが、そのことを聞き、言葉では表すことのできない感情があふれてきた。まだ朝早かったため、私は再度寝て、留守番をしているように頼まれたが、寝られるはずもなく、布団の上ですっと考え込んでしまった。

私の家庭は核家族であったが、幼い頃からよく祖父や祖母と会っていた。年末年始やお盆はもちろんのこと、私の学校行事にもよく来てくれていた。祖父は、いつも自慢のカメラを持参し、私の写真をたくさん撮ってくれた。それが嬉しくてたまらなかった。また、祖父は釣りも好きだった。祖父、父、兄、私の四人で、よく海や川に釣りに行ったものだ。私や兄が魚を釣ると、自分のことのように喜び、そしてそこでもカメラで写真を撮ってくれた。そんな思い出

が次々と蘇ってきた。

その後、葬式やお盆などでとても忙しく、感慨にふける暇もないくらいであったが、一段落し、祖父の家の片付けを手伝うこととなった。私は、祖父が使っていた棚を片付けるよう言われた。棚の戸を開けると、そこからは祖父が自慢のカメラで撮ったであろう写真がたくさん出てきたのだった。祖父や祖母が若い頃の写真や父の幼少期の写真など初めて見るものも多かったが、何枚か繰ると、私の写真が出てきた。二歳ぐらいだろうか、転んでしまっていて泣いている。幼稚園の時、発表会でみんなとダンスをしている。次は、小学校での運動会でリレーを走っている。中学校での部活動の大会でサッカーの試合をしている。次々と出てきた。祖父はいつも私のそばにいて、優しく見守ってくれていた。その眼差しが一気に思い出され、気づけば涙がこぼれてきた。

「俺、じいちゃんにかわいがられていたんだなあ。もっと、じいちゃんと一緒にいたかったなあ。」とつぶやく、私がいた。

小さな怪獣達

会津若松市立第一中学校

一年 星 隆太郎

「シート。静かにして。うるさすぎる。」

夏休みの初め、僕はいとこ達に向かって何回もこの言葉を発した。

今年はこの数年と違っていとこ達と過ごす時間が長かった。僕のすぐ下で七才の男の子。続いて六才の僕の妹。そして五才、四才、二才と女の子が続く。この年頃の子達が集まると、びっくりするほど小さい事でケンカをするし、気付けば物の取り合いをしているし、ふと見ると誰かが泣いているし、吠えているし、まるで動物園のようだ。

みんなと年がだいぶ離れている僕は、この小さな怪獣達に途方に暮れて白目をむきそうになった。一番上だから大人達から、

「隆太郎、よろしくたのむよ。」

と言われたが僕がいくら大きな声で五人を注意しても、大人しく

はならないし、よりヒートアップして僕の声は枯れていくばかりだった。なぜこんなにやかましいのか。何がそんなに悲しいのか。僕にも覚えはある気がするけれどももう忘れてしまっている。

それでも、その小さな怪獣達がニコニコしながらおやつを食べる姿や遊びで役になりきっている姿を見ると微笑ましく思うし、僕に抱き付いてきたり、一生懸命僕に何かを伝えようとしてきたり、眠っていたりする姿を見ると、心の底からかわいいなあと思えた。それまでのイライラしていた気持ちが無くなつていくように感じて、何となくではあるけれど、親の気持ちが少し分かったような気がした。

どんなに頭にきても叱っても、僕はこの小さな怪獣達がとても好きだ。これからもずっとみんなでにぎやかに過ごしていけたらいいと思う。いち兄貴分として恥ずかしくない大人になりたい。

『適当』な母

福島県立好間高等学校

三年 西山 莉央

私の母は適当な人だ。買ってきくと頼んだ物を次の日には忘れて買ってこなかったり、何か失敗しても「大丈夫、大丈夫、このぐらい平気だよ。」と笑ったりで、本当に適当だと思う。昔から母はこんな感じで、本当に大丈夫なのかなと思うほどだが、やる時は、しっかりやる人だ。私の兄や私のことに関しての大事なことになる、人が変わったようにすごく真剣になる。そんな母のおかげで、私たちは成長していき、兄は無事独立でき、私も問題なく高校生三年生になれた。

最近では、私の進路の事もあり、以前よりだいぶ忙しくしているように見える。そんなふうにしても私が進路の事で相談をしにいくと手を止めてしっかり聞いてくれる。母は困っている私に、「莉央がやりたいことは絶対止めないし、やってみて駄目だな、この仕事は自分に合わないなって思ったら無理しないで辞めていいよ。」と言ってくれる。これは母が適当だからではなく、本当に私のことを考えて自由にやらせてくれているのだと思う。

私が母に学校からもらった求人募集一覧を渡した翌日の夜、母は私を部屋に呼んだ。母は、昨日渡した紙を持っていて、その求人募集一覧には、企業名のところどころに赤マルがついていた。思わず私は「こんなを書いてあったっけ。」と聞いた。すると母は、「昨日の夜、莉央に合いそうな企業に赤マルつけてその企業を調べたんだよ。」とあっけらかんと言った。こんな平然そうに言っているが、母は次の日仕事で、毎朝五時に起きて自分と私の弁当を用意し、朝ご飯も作っていて、とても忙しいはずだ。それなのに自分の息子のために寝る間も惜しんで夜遅くまで就職のことについて考えてくれた。

私は、そんな母を尊敬しているし、自分の息子のためにここまでできる人になりたいという目標にもしている。今までこんな私の面倒を見てくれた母へ、私は少しずつ恩を返していこうと思っている。

じいちゃん、ありがとう

福島県立福島商業高等学校

二年 酒井 祈愛

新型コロナウイルスが流行し、学活だけでなく、さまざまな行動が制限された中学二年生の春、母からありえないことを耳にした。

四月下旬に入り、祖父が亡くなってしまった。私の父方の祖父は生まれる前に亡くなっており、本当に唯一無二の祖父だった。とにかくショックだった。毎年、正月に帰省していたが、祖父は仕事で会えず、かれこれ一年ぶりに会うのが棺の中の冷たい祖父だった。親族が一同にそろっている中、私は祖母と母のもとへ行った。理由は、祖父が亡くなった理由を知りたくなってしまったからである。

祖父は肺ガンだった。十年以上闘病していたという。私は全く知らなかった。祖母も母も祖父に口止めされていたという。正直、驚いた。体調がすぐれないときもあるけど、そんなときこそ笑顔でいるんだとよく祖父は口ぐせのように言っていたが、そう思うとず

っと頑張っていたのだなと驚いてしまった。

三回忌をやったとき、おばから伝えられた。私の幼稚園の入園を見届けられないと短い余命を宣告されていたことを言われた。どんなに体調が悪くても相馬野馬追の全日程を連れていってくれたし、夏には海にも連れていってくれる偉大なる祖父であった。

新型コロナウイルスもまだまだ流行しているが、二〇二三年も相馬野馬追が開催される。

コロナに打ち勝つという意味でも、祖父とまた来たかったという意味でも、私の目に強く焼き付けたい。祖父と行ったときの相馬野馬追の躍動感ある馬やほら貝のどこまでも響きわたるあの音は、いつまでも忘れないまま私の心で、記憶の中で流れていくであろう。

じいちゃん、今天国でなにしてるかな。こちらは暑いけど元気にしてっからね。野馬追一緒に行こうね。じいちゃん、ありがとうね。

震災の記憶

福島県立福島商業高等学校

二年 赤間 伊吹樹

二〇一一年三月十一日一四時四十六分、東日本を中心に「東日本大震災」と呼ばれるとても大きな地震がありました。その地震は津波や原発事故などの災害を起こし、多くの人の夢や想い、将来を奪い去っていきました。それは今から約十二年前、私が四歳の時に起こりました。とても幼い頃の記憶ですが、当時の事は簡単に思い出せません。そして、当時様々な人と助け合った事を特に強く覚えていきます。

震災当時、どここの家庭も水が出ず毎日給水所のお世話になっていました。近くの井戸から水を汲んだりもしていました。そんなある日、遠方にいる母の友人から「頑張れ」というメッセージと共にダンボールが三箱も届きました。中には食パンやカップラーメン、水やジュースなどが入っていました。当時幼かった私でも、これはとてもありがたい事だと思いました。そしてその後、当時の私には

理解できないことがあり疑問を抱きました。それは両親が近所の人達用とその水や食べ物を分けていたからです。私は思わず「せつかくの水や食べ物を分けてしまっているの」と母に聞きました。すると母は、「こういう時こそ助け合うべきだし、この食べ物も分けてもらった物なんだよ。」と言ったのです。私はハッとしました。そして自分が元気に生活できていたのは、周りの人達に助けられていたからだと理解しました。この一連の出来事は私のその後の人生に大きな影響を及ぼした事の一つだと思っています。

その後、私は第一に人の事を考えるようになりました。このような私の心構えは確実に「東日本大震災」からできあがったものです。私のように辛い経験から思いやりの大切さを理解するのではなく、日常生活の中でそれが当たり前のように思いやりのある行動がとれる、そんな世の中であってほしいと、私は願っています。

あいさつって…

西郷村在住

蛭田 敦子

図書室常連のKさんの挨拶は、ここう。入室してカウンターの私の顔を見て、ちよつと顔を傾けて目だけで笑い「こんにちは。」私もつい笑顔になって「こんにちは。新着本入ったよ。」なんて情報提供。

中学校の教員を退職し、今は学校司書。教員だった頃はしょっちゅう挨拶について、生徒に話していた。が、実は私は挨拶が苦手だ。相手がパソコンに向かっていたり、何か書いていたりしている、そういうときに挨拶したら妨げるよなとか、中断させたら悪いよなとか、頭に浮かぶ。そして、目まぐるしく動く脳内とは裏腹に、何も音声を発することなくその場を立ち去るというパターン。これが私。

挨拶をされて、それはやめてほしいなと思う経験をしたことがある。

「ワンストップ札」という挨拶のし方を奨励している中学校での

こと。廊下を歩いていると、向こうから急ぎ足でやってくる少年。すれ違いざまに一瞬止まり、頭を下げて「ごさいます。」一秒後には四メートルは離れていた。「ごさいます」って何？顔見えなかつたし。考えつつ私も挨拶の言葉が口から出てきたが、宙をさまよひ尻すぼみに消えた。

もう一つは、学校司書になってからの経験。本を返しにきた小一の男の子。カウンターを挟んで一メートルの距離の私に大音量の「ありがとうございますっ！」校庭で二十メートル先の友だちに叫ぶそのポリウムで。「近いんだから、そんな大声はいらない。」と言ったら、ポカンとした顔で出ていった。

形だけの挨拶や自己満足のためだけの挨拶だったら、むしろ、いい。かと言って、心では思いつつも形に出さないでは伝わらない。難しい。挨拶はコミュニケーションの第一歩。であれば、相手ありきで時や場に応じたものであるべきだ。私は、あの、Kさんの相手の心をほつとさせるようなあったかい挨拶を、今、目ざしている。

あの時できた家族の絆

南相馬市在住

手戸 みきこ

東日本大震災が起きたあの日、私は二十一歳、現在中学三年生の息子は二歳になったばかりでした。当時シングルマザーで息子を育てていました。

その時には一年お付き合いをする男性がおりました。しかし、私自身結婚には臆病になっていて、この先どうするか震災が起きるまで悩んでいました。

群馬県への避難の受け入れがあった時、彼と一緒に避難することを提案してくれました。正直まだ結婚もしていないし、息子が安心できるかなど様々な思いが頭をよぎりました。しかし、自分一人よりも心強い気持ちはあったので、一緒に行くことを決めました。

避難中のバスの中で、二人は仲良く外を眺めたり話したりしているのを見て安心したのを覚えています。私だけでなく息子にも優しくしてくれたからこそ、息子も心を開いていたのだと思います。

す。避難先の不安な中でも、やはり一緒にいることだけで心強いし安心がありました。

数ヶ月の避難を終え南相馬へ帰ってきてからも一緒に生活をして、翌年十一月に籍を入れました。そして今も仲良く暮らしています。

震災では、多くの人が亡くなり、生き残った多くの人の生活を変えました。その中でも避難を通じて絆が生まれ、家族ができたことは一つの大きな転機だったと思っています。

不安な気持ち焦り色々あった二十一歳でしたし、当時二歳だった息子はその時の記憶はないようですが、三人の家族の絆ができたことは自信をもって言えます。

出会いや別れ。色々経験してきましたが、これからこの大きな出会いと家族の絆を壊さないよう生きていこうと思います。

やさしさに触れて

鏡石町在住

小貫 明日香

その日は家族で小さな遊園地へ出掛けました。沢山遊ぼう！とフリーパスを購入し、意気揚々と乗り込みました。人気のアトラクションは多少混んでいるものの、少し並べば乗れる程度でもとても楽しんでいた子供達。

そろそろお昼休憩をしようと持参のお弁当を広げ、リラックスタイム。早々にご飯を食べ終えた二男はまだまだ遊び足りない様子で「あっち見てきていい？」とこちらの返事も待たずに走っていきました。そこはフリーパスを使用しての乗り物ではなく、別料金のゲームや小さな遊具があるスペースで二男はそれを知ってか知らずか、周辺をウロウロしていました。そのうち自分より小さな男の子がその両親であろう人に見守られ、三人乗りくらいの電車に乗っている所で立ち止まった二男。何をするのかなあ？と見てみると、突然その後部座席に乗り込もうとしました。

ちよつと待って！それはフリーパスでは乗れないから！と静止しようにも大声を出すことに憚はばかられていると、その男の子の父親に何かを言われた様子。きつと乗っちゃだめだよとも言われたんだらうなあと思いつつ、足早に私の元へ戻ってくるバツの悪そうな顔をした二男に

「なんて言われたの？」

と聞くと、予想していなかった答えが。

「一緒に乗る？って言われた。」

その返答に私は一瞬で冷たかった頬がぼーっと熱くなり、そうかあ、私はなんて浅はかで心が狭いんだと反省することになりました。

自分さえ良ければ、自分の子供だけ等、自己中心的な考えに陥りがちな日常の中でのその一言。見方を変えて、相手の立場で、俯瞰出来るようにと心掛けていても、なかなか難しいけれど、私も何かの際は、そう声を掛けてあげられる人になりたいと思わせられる出来事でした。

